

## 老莊的人間觀

福 嶋 俊 翁

中國思想の中で尤も哲學的であり、又宗教的でもあると思われるものは從來老莊的思想と言われているものであるが、  
うと思ふ。

もとより老子と莊子とは前後の時代も違い、嚴密に觀れば其の思想も全然同一とは言ひ得られないのであるが、大體において莊子の思想は老子の考を繼承し發展せしめ或は之を完成したと見られるので、ここには老莊的という概括的な見地からその人間觀について一瞥を試みてみたいのである。

現存の老子にしても莊子の著といわれるものにしても、幾分他の學派の思想が混入しており、また後の學徒の文章や思想も多くの部分を占めておるので之を一時代とか個人的の思想として限られる筈のものでは無いであらう。そこでここに取扱うとする問題も老子から出發し、莊子並に其の學派の人々の書き残したと思われるものについての管見に過ぎないので嚴密な考證や研究に基づいたものでないことをばお断りしておきたい。

### 五種の間

今莊子の外篇刻意の文を見ると、先ず人間の類型を五種に分け

(一) 刻意尙行。離世異俗。高論怨誹。爲亢而已矣。此山谷之士。非世之人。枯槁赴淵者之所好也。(非、太平御覽五  
百一引作誹)

(二) 語仁義忠信恭儉推讓。爲脩而已矣。此平世之士。教誨之人。遊居學者所好也。

(三) 語大功。立大名。禮君臣。正上下。爲治而已矣。此朝廷之士。尊主彊國之人。致功并兼者之所好也。

(四) 就藪澤。處閒曠。釣魚閒處。無爲而已矣。此江海之士。避世之人。閒暇者之所好也。

(五) 吹呬呼吸。吐故納新。熊經鳥申。爲壽而已矣。此道引之士。養形之人。彭祖壽考者之所好也。(道、熈熈唐  
寫本作導)

と言つている。ここに擧げた(一)の場合は峻烈嚴格な精神と高尚脱俗的な行動を愛し、自ら世を離れ、自ら高く止つて一切の俗世間を俯視し、山谷に隠れて獨善超越を事とする人間であつて、一種の所謂清教徒的人といわれるべきものである。

(二)の場合は、口を開けば仁義忠信を論じ、恭儉推讓、己を修めることに専心し、平和な治世に在つて教育を任とする道德の實踐家であつて一種の所謂道學者的人物である。

(三)の場合は、君臣上下の禮を正しく守り、國家の爲に大功を立て、天下を善治することを任としている所の朝廷の士、經國派の人で一種の所謂政治家型の人物を指しているのである。

(四)の場合は、片田舎に幽居し閑散な生活を樂しみ、靜に釣魚などをして、いとも吞氣に世を送ることを理想としている所の江海の士、避世の人であつて、一種所謂自然主義的の人物に當るのである。

(五)の場合は、先ず健康第一主義で、常に深呼吸を行い、新鮮な空氣を吸込んで、古い濁つた空氣を吐出し、恰も熊が木に上つて氣を吸う如く、鳥が頸を長く伸して體を運動さす様にして、長壽することを唯一の目的としている一群の人物即ち導引の士とか養形の人とか言われる者で、一種の所謂仙人型に屬するものであろう。

かくの如く刻意篇の初に取擧げられた五種類の人間の風格は、一應世俗一般の野卑な生活者よりは少しく高潔なように認められるけれ共、之を以て老莊一流の學派では理想的最高の人間とは考えていないのである。何となれば以上の如き人間には未だ作爲的なものが多分に存在するからである。この作爲的な所を放棄し、その凡てを否定する所の第六の類型が要請されねばならぬとするのである。即ち第一の類型の人の様に、特に心を鋭くすることなしに高尚であること、第二の類型の如くに仁義を行わんが爲に行うということ無くして身が修まり、第三類の人の如くに功を求め名を求めないで自然に天下が治まり、第四類の人の如く江海に逃れることを求めずして自ら閑かであり、更に第五の場合のような導引の法などを行うこと無くして壽であるといった人間であつて、畢竟心が一方に滞ることなく澹然虚曠、無窮に應じてあらゆる美が自然に集るといふ風な人間即ち天真流露、天地自然の本質を完全に具現する底のものでなくてはならぬと見、そこに眞の人間、完全な人物の姿があるとするのである。<sup>(1)</sup>かくの如き境地に到達したものを真人又は神人又は聖人といい、至人とも呼んでいるのである。而してそれは「道」そのものの具體化された生活であつて所謂絶對的人格なのである。

## 眞 人

老子は一切萬物の根本をば假に「道」と名づけ、人間もその修養の極致はこの「道」に復歸するという事であり、道に復歸することは人と宇宙萬有の本體と合一することだと考え、個我を捨てて無名の道と融合同化することだとしている。

吾所以有大患者。爲吾有身。及吾無身。吾有何患。（老子第十三章）

吾の大患ある所以は吾の身を有するが爲めなり。吾の身無きに及ばば、吾何の患かあらん。

と老子は言っているが、ここに無身というのは個我を忘れるという意味であつて、單に身體を絶滅するという意味ではない。吾人の形體を環る我執とか我欲とかから生ずる束縛から解放された寂靜無爲の境涯に達した法悦を體驗する意味である。莊子には

物物不物於物物。

物を物として物に物せられず。

とか

天地與我並生。萬物與我爲一。(齊物論)

天地我と並び生じ、萬物我と一たり。

と言つていゝような靈的に絶對自由な境致に達することである。

然らばかくの如き「道と一」なる人格に到達するには如何に爲すべきか。この生活の問題に關しては老子の書に於て語る所を聞かないのである。莊子の大宗師篇にはこの眞人の生活、眞人への道について詳説している。而して莊子は先ず坐忘と心齋ということを擧げているのである。

## 坐 忘

莊子の書には儒家の孔子と彼の高弟顔回との問答に擬し、顔回が仁義を忘れ、數日して禮樂を忘れ、更に數日の後に坐忘したと告げたのを聞いて孔子は、自分も汝に従つて其の後を追いたいと言つて彼に敬服する所の話頭を記している。<sup>(2)</sup>

もとより之は莊子が自らの體驗を示す假話であつて、ここに坐忘といつてゐるのは、肢體即ち肉體的な欲望を廢毀

し、聰明即ち知識的な欲求をも退除し、大道に同化することである。かくの如く形を離れ知を去る所の坐忘は無心無我となることである。内に其の一身あることを覺えず、外に天地あることを識らず、曠然として變化と體同し、隨處に主となるといったような絶対自由の體驗である。換言すれば坐忘は心身打失することである。大道に同ずるといのは實在一般即ち道と一如になることなのである。わが白隱禪師は

心死し意消して空蕩々、虛索々、百仞の崖畔に在るが如く、手脚の著く可きなし。去死十分、胸間時々熱悶して忽然として話頭に和して心身共に打失す。是を驗崖に手を撒する底の時節と云ふ。豁然として蘇息し來れば水を飲んで冷暖自知する底の大歡喜あらん。(遠羅天釜)

と述べているが、之は禪家の悟境を語られたので、それとこれとは全く同趣とは斷じ得ないにしても思想的に相近いものがあるのではなからうか。

## 心 齋

莊子の人間生篇には、孔子の弟子顔回が、我家は貧しいので酒も飲まず、葷も食わず、數ヶ月身を清くしているのであるが、之を以て齋したと言えらるだらうかと孔子に問うた。孔子は、それは祭祀の時の齋であつて心齋ではない。心齋というのは、志を一にし、聽くに耳を以てせず、心を以てする。聽くに心を以てせず、氣を以てする。耳は聽くに止まり、心は符に止まる。氣は虚であつて物を待つものである。唯道は虚に集るので、虚こそ心齋であると教えたという話を書いている。<sup>(6)</sup>即ち齋する事の眞意は心の統一にある。純一無雜になることである。ものを聽くにも感官の耳で聞くのではなく心という統覺によらねばならぬのである。心の作用は外界の刺戟と合一する「符」という期待的なものが内在しているから、その心を用いてもいけない、個性を滅して虚なる氣によつて道に合せねばならぬ。心齋と

は虚心であり、心の用を超えることであると言うのである。之について莊子の養生主篇に文惠君なる人に對して庖丁なる者の言をあげ、庖丁が牛を解く修鍊を積むこと十九年「方今の時、臣は神遇を以てして目視を以てせず。官知止まつて神欲行く」と語つて<sup>(4)</sup>いると同じく、五官の知覺に由らず、無心的直觀によることが技を超えた道の生活だといふ如き生活である。かような自由無礙なる人格が出来るまでには相當の長い經驗と反省が必要であることは言うを俟たないのである。

なお莊子の達生篇にも鬪雞の話が描かれている。それは紀渚子という人物が王の爲に一羽の鬪雞を育てていた。十日程経つと王は、「もうぼつぼつ鬪雞に使つてもよいだろう」と曰う。紀渚子は「まだいけません。虚僑（高く頭を擧げること）して空元氣ばかりで力が充實していません」と答えた。又十日すると王は「もういいだろう」と曰う。紀渚子は「まだいけません。響景（響に應じて鳴き、影を顧みて行くこと）に應ずる如く、相手を見ると昂奮して心を動かす所がありますから」と答えた。王は更に十日して又催促した。紀渚子は「まだまだです。物を願視することが急疾で、敵を求めて、己が勝とうとする野心がありますから」といつて承知しない。また十日過ぎると王は、「もうやらせてよいだろう」といふ。紀渚子はそこで「もうそろそろ宜しいでしょう。他の雞が鳴きましても此の雞は一向平氣でそれに應ずる氣配がありません。勝敗などは超越している様子でありますから、見たところ木礪のようで、精神が統一されて徳が完全であります。他のどんな雞でも應戦するものはありますまい。之を見て皆走り逃げますよ」と答えたといふのである。<sup>(5)</sup>木彫の雞のように無感覺無感情となつていふのは、外界の刺戟に應じて直に心を動搖せしめず、純一な心境に在ることを示したのであつて坐忘に類するのである。然し莊子の此の篇には如何にしてかくの如き境地に至らしめるからの方途については別に語る所がない。

莊子雜篇中の寓言篇には人間として完成する次第、進展の事情について次のように述べている。

顏成子遊という人がその師の東郭子綽から教えられて最初の一年間の修爲工夫によつて「野」となつた。「野」というのは浮華の心を取り去つて素樸となり、所謂機心がなく、變詐の心を動かさないことである。更に二年目には「從」となつた。「從」とは衆人の意志に随順して自ら憎愛取舍の心を起さず、自らを固執する念を離れるに至つたことである。

三年の後に顏成子遊は「通」となつたという。「通」とは「從」から一步を進めて、無人、無我で外境にこだわることのない、自由性を獲得したということである。更に四年目に「物」となつた。この「物」とは我という主觀的意欲を滅して、槁木死灰の如く、人情から離れたという意味である。それから五年して彼は「來」という心境に達した。この「來」というのは、往いて來ることのある如く幻滅の殻を破つて自得する新生面を開いたことである。次に彼は「鬼人」に達した。「鬼人」とは鬼神とその屈伸を同じくし、客觀的の理法を自己の裡に見出す所まで進んだということである。七年の後彼は「天成」に達した。「天成」とは造化自然と合一した所の心境である。更に八年の後、彼は「不知死、不知生」となつた。その意は始から天（自然）もなく人もなく、始もなく、終もない、生死の差別をも認めず、「無」に這入つたことである。九年目に彼は遂に「大妙」という所に來た。「大妙」というのは、「生を知らず、死を知らず」とする、知るもの知らざるものたらしめる主觀的なものを超越し、絕對無とも言つてよいが、所謂眞實の道と合體した極致、即ち靈性的絕對自由人格に悟入したのである。先に述べた所の坐忘とか心齋とかも、この大妙という境致に外ならぬと考えられる。ここに至つて始めて人格の眞の完成があり、至人、眞人、聖人たり得たることになる。されば眞の自由人格は天と一となり、自然のままであり、己自身を滅することによつて己自身を完成することを意味し、自己が無になることによつて己自身を深く自覺せしめ、在るものが在るがままに自己自身を見るものとなるのである。莊子は

之人也。之德也。將旁礴萬物以爲一。(逍遙遊篇)

この人やこの徳や、特に萬物に旁礴して以て一たらんとす。

至人之用心若鏡。不將不迎。應而不藏。故能勝物而不傷。(應帝王篇)

至人の心を用ふるや鏡のごとし。將おくらず迎へず、應じて藏せず。故に能く物に勝つて傷らず。

至人神矣。大澤焚而不能熱。河漢ハ沍而不能寒。疾雷破山。飄風振海而不能驚。(齊物論)

至人は神なり。大澤焚くも熱する能はず。河漢ハ沍れども寒ひやえさす能はず。疾雷山を破り、飄風海を振うかせども

驚かす能はず。

と言つている様に、物との對立がなく、時間も空間も己と別物でなく變化と一體であるものが至人即ち絕對者と見るのである。

若夫乘天地之正。而御六氣之辯。以遊無窮者。彼且惡乎待哉。故曰。至人無己。神人無功。聖人無名。(逍遙遊)

若し夫れ天地の正に乘じ、而して六氣の辯(變に同じ)を御し、以て無窮に遊ぶ者は彼れ且またに惡なをか待たんとするや。故に曰く、至人は己無く、神人は功無く。聖人は名無しと。

と説いて、天地の正即ち萬物の本體と順同し、六氣の變即ち自然の變化現象と其のままに一となり無限の世界に遊ぶで、一切の時間も空間も超えて眞の自由の境に逍遙自適するならば、その人は何ものにも依存せずして如何なる束縛もない。故に世俗的な自我にも世間的な價值にも、人間的な名譽にも捕われることが無いと言うのである。畢竟ここには道即絕對なるものが即我であり、自然即我、我即自然となり、自己を空することによつて道と一體となることを提唱しているのである。

黄檗禪師の傳心法要に



心境雙志。乃是眞法。息念忘慮。佛自現前。

心と境と變び忘ずる乃ち是れ眞法。念を息め慮を忘じて佛自ら現前す。

と言ひ、わが道元禪師が

佛道をならふといふは自己をならふなり。自己をならふといふは自己をわするるなり。自己をわするるといふは萬法に證せらるるなり。(正法眼藏、現成公案)

と覺かれている意と考え合わせると、この老莊の教うる所には宗教的色彩が濃厚であり、禪的悟境に近いものがあることを感ずるのである。

然しここに注意すべきことは

聖人常善救人。故無棄人。常善救物。故無棄物。是謂襲明。(老子、二十七章)

聖人は常に善く人を救ふ。故に之を棄つること無し。常に善く物を救ふ。故に物を棄つる無し。是を襲明と謂ふ。

といい、清靜な道を以て民を無欲無感ならしめるといふ意味で人を棄てず、輕ろがろしく一物をも棄てないから物を棄てることがない。聖人は物欲の蔽がないから明らかである。民も清靜の道に安ずれば物欲がなく、上下一徳であるから重ね重ねの明るさがあるという風に主張する點から言えば、政治的經世的な意味が多分に含まれていて、大乘佛敎の所謂自他平等、衆生と共に佛道を成ずるといつた悲願に缺けていることは救濟的宗教と認めるには尙距離があると言つてよいと思う。老莊的にいえば個人の完成という點に重點が置かれていて、佛敎特に禪に似た思想は、その至る處に見出される様であるけれ共、やはり之は一種の人生哲學という領域に留まつていと申さねばなるまいと思ふのである。

- 法(1) 若夫不刻意而高。無仁義而脩。無功名而治。無江海而問。不道引而謙。無不忘也。無不有也。澹然無極。而衆美從之。此天地之道。聖人之德也。(莊子外篇刻意)
- (2) 顏回曰。回益矣。仲尼曰。何謂也。曰。回忘仁義矣。曰。可矣。猶未也。它日復見。曰。回益矣。曰。何謂也。回坐忘矣。仲尼覽照曰。何謂坐忘。顏回曰。墮肢體。黜聰明。離形去知。同大通。此謂坐忘。仲尼曰。同則無好也。化則無常也。而果其賢乎。丘也請從而後也。(莊子內篇大宗師)
- (3) 顏回曰。回之家貧。唯不飲酒。無茹葷者數月矣。若此則可以爲齋乎。曰。是祭祀之齋。非心齋也。回曰。敢問心齋。仲尼曰。若一志。無聽之以耳。而聽之以心。無聽之以心。而聽之以氣。耳止於聽。心止於符。氣也者。虛而待物者也。唯道集虛。虛者心齋也。(莊子內篇人間世)
- (4) 始臣之解牛之時。所見無非牛者。三年之後未嘗見全牛也。方今之時。臣以神遇。而不以目視。官知止而神欲行。(莊子內篇養生主)
- (5) 紀渚子爲王養鬪雞。十日而問。雞可鬪已乎。曰。未也。方虛憊而恃氣。十日而又問。曰。未也。猶應響景。十日又問。曰。未也。猶疾視而盛氣。十日又問。曰。幾矣。雞雖有鳴者。已無變矣。望之似木雞矣。其德全矣。異雞無敢應。見者及走矣。(莊子外篇達生)
- (6) 顏成子游謂東郭子綦曰。自吾聞子之言。一年而野。二年而從。三年而道。四年而物。五年而來。六年而鬼入。七年而天成。八年而不知死。不知生。九年而大妙。(莊子外篇寓言)